

## 『古今集遠鏡』に於けるワシ・オレ（2）

塙澤和子

### —

前稿では、俗語訳に現れるワシ・オレの性格の相違を、1歌人の性差、2和歌の読み手の有無、の2点から考察した。本稿では、「3文末表現との対応」を取り上げる。

『遠鏡』における二人称代名詞と文末表現との対応を論究したものに、小島俊夫（1998）「古今集遠鏡における近世語訳の敬語体系」がある。小島は、「古今集遠鏡（一七九四）における近世語訳の敬語体系を、対称代名詞の構成する主述呼応の諸形式を手がかりとして、明らかにすること」を目標に、敬意の内容を七段階に区分し、「対等の関係」「下位の者から上位の者へ」「上位者から下位者へ」「ののしり表現」の4点から考察を行っている。例えば「対等の関係」では、贈答歌一組四首を取り上げ、これらはいずれも「尊敬・謙譲の単語なしに、つくられている」が、俗語訳では「敬語が用いられた近世京阪語訳が施されている」とし、次のような関係を指摘する。

訳のなかの「オマヘ・ソナタ…オトマリナサル・タトエラレル」・「ソナタ…思召ス・オッシャル」に見られる主述呼応の形式は、段階B-1（話し相手に対する話し手の、礼を失しない範囲での、くつろいだ敬意。対

等に相互に、中流以上の階層が広く使用)に所属するものと、本居宣長によって、位置付けられている。(143頁)

また「下位の者から上位の者へ」では、「段階A(上位の話し相手に対する下位の話し手の最上級の敬意・対等に相互に対話する場合には、最上級の社交と教養を反映)に該当すると認められる」(144頁)例を挙げ、次のような呼応形式を指摘する。

「アナタ様・アナタ 御繁昌ナサリマス」・「ワタクシ 敷シマセウト存ジマスル・ゴザリマスル」などの主述呼応の形式がその根拠である。(145頁)

そして結論で、対称代名詞の構成する主述呼応の形式を一覧表にまとめ、段階ごとに重複する代名詞、述語を含めて、主述の呼応関係を整理している。

小島が採用した七段階は、山崎久之の五段階を参考にしたものであるが、「遠鏡」の主述呼応関係が七段階に亘つて出現する様相に關し、「十八世紀後半の京都方言による『古今集遠鏡』の訳は、二十世紀の(京都方言による)訳よりも、歌のなかの人間関係における社会的地位(身分)の差違に基づく(精彩な表現の場)が反映されているかと考えられる」と述べている。

さて本稿では、主として山崎久之の敬意の五段階を参考にしながら、男性歌人の俗語訳に出現するワシ・オレについて、叙述表現との呼応関係から待遇価値を探つてみたいと考える。

## 二

考察にあたり、前稿に引き続き、読み手の有無を基準とする分類に基づき、順次検討を加えていくことにする。繰り返しになるが、読み手の有無を分類の基準として、分析した結果を次に述べておく。

原歌には、「相聞歌」のように直接の読み手(相手)が存在する和歌もあれば、相聞歌ではないが読み手(相

手）を意識し、相手を想定、仮想して詠んだ和歌もある。その一方で具体的な読み手を意識せず、自己と向き合ふ自己の内面の世界を詠んだ和歌もある。そこで読み手の有無を基準として、男性歌人の一人称代名詞ワシ・オレに関し、その出現状況を検討することから始めた。

その結果、ワシは読み手が存在する和歌に、オレは読み手不在の和歌に、それぞれ出現する傾向の高いことが確認できた。特に相聞歌のように読み手（相手）の存在を必要とする場合は、全てワシのみが出現し、オレは一例も出現しなかつたし、相聞歌以外で相手の存在が想定できる和歌でも、ワシの方が優勢でオレは数例のみ出現する程度であった。それに対し、読み手（相手）の存在を必要としない和歌、例えば自然の景物に接した心情の吐露、失恋の歎き、人の世の倦き、老いの述懐などを詠う和歌の俗語訳には、オレの方が優勢で、ワシの例は微々たるものでしかなかった。

この読み手存在和歌を、仁田義雄の「聞き手存在発話」に置き換えて解釈すると、ワシ・オレの違いは、次のようなになる。仁田義雄は「〔丁寧さ〕といつた文法カテゴリーの発現には……聞き手の有無が、重要な要件になつてゐる」と指摘するが、その点を考慮すると、ワシは読み手の存在する和歌に多く出現する点で「丁寧さ」をする代名詞、オレは読み手を要しない和歌に多く出現する点で「丁寧さ」を有しない代名詞と見なすことが出来る。

この結果を参考に、本稿では、前稿で立てた読み手存在の有無とその分類基準（次頁参照）をもとに考察を進めていく。

## 〔分類基準〕

- A 存在：具体的な人物、意識上想定されている人物の存在が確認できる。
- 1 相聞歌の形式を取る。
  - 2 原歌、又は俗語訳に作者と関わる特定の人物の存在が確認できる。
  - 3 詞書き、俗語訳の叙述表現などから、特定の人物に対する返歌であることが確認できる。
- b 詞書き、俗語訳に二人称代名詞（君、オマヘ、ソナタ、貴様など）が出現する。
- a 原歌、又は俗語訳に「恋人、知友」：「アノ人、カノ人、ソノ人、思フ人」などと出現する。
- b 第三者：「コレ世間の衆、女中タチ、橋守ヨ」などと出現する。
- c 故人：近親の者を悼む歌で想定されている特定の故人
- B 不在：「A 存在」に該当しない歌全てを含み、作者が自己の内面に向かい、自己の心情を表出した歌を対象とする。ここには懸想の辛さ、失恋の痛手、老いの嘆き、季節の変化に搖らぐ心を詠つたものなどが含まれる。言語形式上の特徴をもとに、次の2種に分類した。
- B 1 直接的な心情の表出
  - B 2 自然物に仮託して心情の表出

## 三

- 1 A 1 相聞歌  
相聞歌9首では、ワシのみが出現し、オレの使用は1例もない。次にいくつか例を示す。（例文の傍線は、筆者が付す。以下同じ）

① かへし

425たもとよりはなれて玉をつゝまめやこれなむそれとうつせみむかし

○貴様ハ袖へ入レウトシタナラヂキニキエルデアラウカト云ハシヤルガ  
袖ヨリ外ニ玉ヲツツマウ物ハナイハサテ スレヤ貴様ノ袖ヘツ、ンデ コレガサソレデゴザルト云テ ワシガ  
袖ヘウツサツシヤレ ワシモ見ヤウワサ

② かへし

979きみをのみ思ひこしちのしら山はいつかは雪のきゆるときある

○イヤ／＼サウデハゴザラス 貴様ノ事バツカリ思ウテ ワシガ來タ北國海道ノ白山ハ イツサ雪ノ消ル時ガ  
ゴザルゾイ 御聞及ビテモアラウガ 白山ノ雪ハ春デモイツデモキエハ致サヌ ワシガ思ヒモソノトホリデゴ  
ザルゾヤ

③ かへし

707おほぬさと名にこそたれ流れてもつひによる瀬はありてふ物を

○サアワシハソノヤウニ引ク人ガ多イ大ヌサヂヤト 名ニコソタレラレタレ 其大ヌサハ川ヘ流レテハユクケ  
レド ドコヅデハ流レテヨル所ノ瀬ハアルト云ノニ アンマリソノヤウニ大ヌサヂヤ大ヌサヂヤト云テ下サル  
ナ ワシヂヤトテ末デハドウデヨル所ガナウテハサ ソノヨル所ハオマヘヨリ外ニアロカイノ

④ かへし

974なにはがたうらむべきまもおもほえずいづこをみつの海士とかはなる

○ワシハ ソノヤウニソナタニ恨ミラルルヤウナ ナンニモ覺エハナイニ 何ヲマアフソクニ思ウテ尼ニハナ  
リヤツタゾイ

⑤ かへし

646かきくらす心のやみにまどひきに夢うつゝとは世人さだめよ

なりひらの朝臣

壬生ノ忠岑

宗岳ノ人頼

なりひらの朝臣

## 「古今集遠鏡」に於けるワシ・オレ (2)

○ サイナユウベノ「ハ イツソ心ガクラガツテ闇ノ夜ニ道ヲイクヤウデ ドウデアツタヤラワシモサ一向オボ  
エマセヌ 夢デアツタホンマデアツタト云」ハ世間ノ人定メテクレイ

相聞歌でワシは「かへし」の歌の俗語訳に出現するが、ワシに対する相手(→印の後の人物。以下同じ)の二人称は、主として男性(63は不明)は「貴様」、女性は「オマヘ・ソナタ」である。この二人称との対応を基準に、呼応する叙述表現を整理すると、次のような。

- |                     |            |            |                                   |
|---------------------|------------|------------|-----------------------------------|
| (4)                 | (3)        | (2)        | (1)                               |
| ワシ—なし               | ワシ—オマヘ     | ワシ—ソナタ     | ワシ—貴様                             |
| ：在原業平→よみ人しらず（旧知の間柄） | ：在原業平→紀有常娘 | ：在原業平→紀有常娘 | ：在原業平→よみ人しらず（斎宮なりける人）             |
| 6 4 6               | 7 0 7      | 7 8 5      | 6 3                               |
|                     |            |            | 壬生忠岑→在原滋春 4 2 5                   |
|                     |            |            |                                   |
|                     |            |            | 宗岳大頼→作者不詳（凡河内躬恒か） 9 7 9           |
|                     |            |            |                                   |
|                     |            |            | ワシ                                |
|                     |            |            | ：参ッタレバ、参ラズバ、キエハ致サヌ                |
|                     |            |            | ワシガ（袖）                            |
|                     |            |            | ：ウツサツシャレ、ソノトホリデゴザルゾヤ              |
|                     |            |            | 貴様                                |
|                     |            |            | ：云ハシヤルガ、御聞及ビデモアラウガ                |
|                     |            |            | ワシ—ソナタ                            |
|                     |            |            | ：橋清樹樹→あひしれりける女                    |
|                     |            |            | 6 5 5 小野貞樹→小野小町 7 8 3             |
|                     |            |            | 作者不詳→女 9 7 4                      |
|                     |            |            | ワシ—キツウヌレルデアラウ、トマラレヌヂヤワインノ、着ヤウワサテ、 |
|                     |            |            | ワシガ（心）：カハラウゾイ                     |
|                     |            |            | ソナタ：タトヘラレタガ、尼ニナリヤツタゾイ             |
|                     |            |            | ワシ—オマヘ：在原業平→ある女                   |
|                     |            |            | 7 0 7                             |
|                     |            |            | ワシ：大ヌサヂヤト、名ニコソタテラレタレ、アロカイノ        |
|                     |            |            | オマヘ：云テ下サルナ                        |

山崎久之は「江戸後期（上方）の待遇表現体系」で、男性語の待遇表現として、オマヘを「寛政末年から化政期にかけての対称の第二段階」に、「貴様（貴公）・そなた・わがみ」を「化政期の第三段階」に挙げている。しかし「貴様」は、明和・安永期では、「助動詞「しやる」「給ふ」や対者尊敬の「ござる」などの第二段階所属語に対応するのが普通であつて化政期になつて下落した第三段階には未だなつていなかつたようであると述べている。

なお第二段階に関しては、町人言葉に対し「武士ことば」や「町人でも家主や庄屋のようなれつきとした町人」では、「おまへ＝殿　しやる　わし＝ます」（594頁）のような対応関係が認められるという。「遠鏡」には、第一段階の「貴様」御聞及ビ」「ワシ 参ル・致ス」、第二段階の「オマヘ」云テ下サルナ」、「貴様 云ハシャル」「ワシガ（思ヒ）—ウツサツシャレ・ゴザル」「ワシ・オボヘマセヌ」、第三段階の「ソナタ・ニナリヤツタゾイ」「ワシ—見ヤウカヤ・見ヤウワサ・トマラレスヂヤワイノ」など、ワシは二人称代名詞と対応する形で、第一段階から第三段階にかけて出現するのが確認できる。

なお「ヤル」は化政期（第三段階）の用例が少なくなりはしても、「武士→妻」「旦那→おい」「父→娘」などの使用例があり、「ソナタ—ヤル」は同じ待遇価値を持つ同類語である。「遠鏡」では「ソナタ—尼ニナリヤツタゾイ」など、第三段階の例がある。

## A2 特定の人物の存在・想定

### 2-1 A2a 二人称代名詞の出現

原歌7首のうち、ここにはワシのみが出現し、オレの使用は1例もない。

3 8 6 秋霧のともに立出てわかれなばはれぬ思ひにこひや渡らむ

○アノ霧ノ立ツヤウニ貴様モ共ニ立出テイカシヤツテ御別レ申シタナラ ワシハ今カラハアノ霧ノハレスヤ  
ウニ心ガハレズニイツモオナツカシウ思ウテタテルデゴザラウカイ

②

6 8 0 君といへば見まれ見ずまれふじのねのめづらしげなくもゆる我戀

○富士ノ山ノモエルノハジヤウヂウノ「デ」メヅラシイ「モ」ナイガワシモオマヘノ「ト」サヘイヘバ逢テモアハ  
イデモイツデモフジノ山ノヤウニ戀ノ思ヒガモエマス

藤原ノたゞゆき  
ふかやぶ

③

6 0 3 こひしなばたが名はた、じよの中のつれなき物といひはなすとも

○ワシガモシ此通リデ戀死ンダナラバ ツレナイ人ハ 深養父ハカワイヤワシユエニ死ンダトハイハズニ タ  
ド一ト通リニ世ノ中ガ無常ナ物デ死ンダヤウニ云ヒナシテオクデカナアラウガ タトヒサウハ云ヒナストモ  
世間ノ人ハヨウ知テ居レバ 外ノ事デ死ンダトハ云マイ 君ユエニ死ンダト云ヒフラシテ君ガ名ハ立ツデアラ  
ウ

ワシと関係する相手はすべて女性で、その女性の二人称代名詞は（→印の後の人物）、「貴様、オマヘ、君」である。相聞歌では「貴様」は主に男性に用いる二人称代名詞であったが、ここでは専ら女性に用いている。俗語訳では、「貴様」は男女兼用の二人称代名詞となっている。

(1) ワシ—貴様 : 平元規→旅立つ恋人 3 8 6

ワシ・御別レ申シタナラ、オナツカシウ思ウテタテルデゴザラウカイ

貴様：出テイカシヤツテ

ワシ・オマヘ：凡河内躬恒→恋人 608、藤原忠行→恋人 680

河原左大臣→恋人 724

ワシ・思ヒガモエマス、見タノヂヤワイ、心ヲチラサウゾ、ワシヂヤナイゾエ

ワシ・君：清原深養父→ツレナイ人 603、藤原興風→恋人 567

紀貫之→恋人 572

ワシ・恋シウ思ウテ泣ク涙ガ、恋死ンダナラバ、云ヒナシテオクデカナアラウガ、

ワシガ（身）：ミヲツクシニサナツタワイ、身ヲツクシテシマウテノケルデアラウ

君ガ（名）：立ツデアラウ

「貴様」と対応するワシは、「御別レ申シタナラ」「オナツカシウ」などの第一段階、「思ウテタテルデゴザラウカ」の第二段階である。オマヘと対応するワシは第二段階の「思ヒガモエマス」、第三段階の一見タノヂヤワイ、心ヲチラサウゾなどである。「君」と対応するワシは専ら第三段階の「ミヲツクシニサナツタワイ、身ヲツクシテシマウテノケルデアラウ」のみで、ここには敬意は認められない。

相聞歌の場合と同様、ワシは一人称代名詞との関わりで、第一段階から第三段階までの叙述表現と対応している。

## 2 A2 特定の人物の存在

2-2 A2b 特定の人物への返歌

原歌7首のうち、俗語訳にはワシが6首6例、オレが1首1例ある。

(1) ワシ

①よりよりとこなつの花をこひにおこせたりければ　をしみて此哥をよみてつかはしける

みつね

167 ちりをだにすゑじとぞ思ふ咲しより妹とわがぬる床なつの花

○手前ノトコナツハ カ、トワシガ二人寝マス床ナツデ 大事ノデゴザル 花ガサイテカラハ 塵サヘカケマ  
イトサ存ズルホド大事ノデゴザル 折テハエシンジマスマイ  
②やまひにわづらひ侍ける秋こゝちのたのもしげなく（ドウヤラ快氣シソモナウ）おぼえければよみて人のもとにつかはしける

### 大江ノ千里

8 59もみぢ葉を風にまかせて見るよりもはかなきものは命なりけり

○紅葉ヲ風ノフクナリニシテオイテ見ルヨリモ マダハカナイ物ハ ワシガ命デゴザルワイ モウノカウ申  
ス今モシレマセヌ

③ 人をとはで久しう有けるをりにあひうらみければよめる あひは、一本に、あひてとあるぞ、よろしかるべき、

9 7 7 身をすてゝゆきやしにけむ思ふよりほかなるものは心なりけり

○オウラミ御尤デゴザル 挙者モナニカト據ナイ事ニトリマギレテ 存ジナガラ久シウ心外ニ御無沙汰ヲ致  
シタ 我身ナガラ心ニ思フヤウニハナラヌ物デゴザルワイ 身ハ我身ナレバ ドウナリト我心シダイニナルハ  
ズデゴザルニ 心ニ思フヤウニナラヌノハワシガ心ハ 身ヲバ捨テオイテヨソヘインデシマウテ 心ト身トガ  
別々ニナツタカシリマセヌ

① (2)  
オレ

たゞみね

1036かくれぬのしたよりおふるねぬなはのねぬ名はた、じくるないとひそ

○・シヨニ麻サヘセズバ メツタニ名ハタチハスマイホドニ 隨分忍ンデオレガ來ルバカリヲバ ソノヤウニ  
イヤガラシヤルナイ

詞書きや叙述表現から判断して、ワシと関わる相手は、宿の主（42）、隣人（167）、恋慕の対象となる女性（614）（977）（1050）、辞世の歌を送る相手（859）などである。またオレと関わる相手は、作者を厭うていると思われる女性である。ここに出現する叙述表現は次のようである。

- 1 ワシ・カケマイトサ存ズルホド、カウ申ス今モ、御尤デゴザル、御無沙汰ヲ致シタ、二人寝マス床ナツデ、別々ニナツタカシリマセヌ、キモノツブレタコトヤノ、推量シテクレカシ、
- 2 オレ：来ルバカリヲバ、イヤガラシヤルナイ

ワシは第一段階の「存ズル、申ス、御無沙汰ヲ致ス」をはじめ、第二段階の「寝マス、シリマセヌ、御尤デゴザル」、第三段階の「コトヤノ、推量シテクレカシ」に至るまで、ここでも三つの段階に渡つて出現していることが注意される。

それに対しオレの方は、敬意のない平常語「来ル」を使い、相手には第一段階の「イヤガラシヤルナイ」を使っている。ただ「シャルナイ」と、禁止の助詞「な」に添意助詞「い」が付く形をとるため、敬意を表すと言うよりもむしろからかい半分でシャルを使用しているとも解せる。山崎久之は第四段階の例に、平常語に「かい」の接する「遊ていかんかい、行んかい」などを挙げているが、この例から見ると、オレが呼びかける相手に「シャルナ」ではなく「シャルナイ」を当てたのは、第四段階に通じるくだけた表現と解する方が妥当のような気がする。

## 3 A3 特定の人物を想定

3-1 A3a 恋人・知友

原歌22首のうち、俗語訳にはワシが20首24例、オレが2首4例ある。次に例を示す。

(1) 11 ワシ

555秋風の身に寒ければつれもなき人をぞ頼むくるよに

○ワシガ思フ人ハツレナイ人ナレドサ 秋風ガ身ニシンデ寒ケレバ日ガクレ、バ毎夜モシヒヨツト見エル「モアラウカト思フテ ワシハソレヲ頼ミニスル

(2)

貫之

604津の國の難波のあしのめもはるにしげき我戀人しるらめや

○難波ノ芦ノハルカニ見エル所マデヒツシリトシゲウハエテアル如クニンゲイ此ワシガ戀ヲ思フ人ハカウトハ知ウカイ コレホドニアラウトハ知ルマイ

(3)

しもつけのをむね

728くもり日の影としなれる我なればめにこそ見えね身をばはなれず

○ソラノクモツタ日ニハ 人ノ影ノアツテモ見エヌヤウナモノデソレト目ニ見エコソセ子 ワシハ戀ニヤセホソツテ 此ヤウニ影ノヤウニナルホド思フ「ナレバ 人ノ影ノ身ヲハナレヌヤウニ 心ハジヤウヂウ思フ人ノ身ヲハナレハセヌ

かねみのおほきみ

(4) 779すみのえのまつほど久になりぬればあしたづのねになかぬ日はなし

○コヌ人ヲクルカ／＼ト待テ居ル間タガ久シウナツタレバ ワシハ毎日ナカヌ日ト云ハナイ

(2) オレ

一本 ふかやぶ

1042 思ひけむ人をぞともに思はましまさしやむくいなかりけりやは

○マヘカタ誰レゾオレヲ思フタ人ガアツタデアラウ 其時ニコチカラモ 其人ヲ思ウテヤレバサヨカツタニ  
コチカラハ 思ハナンダデ ソノムクイガキテ 今オレガ思フ人ガ オレヲ思フテクレス ア、アラソハレ  
ヌ「ヤノ ムクイト云「ハナイ・カイキツアル「ヂヤワイン」

ワシが意識上想定する相手は、恋の対象となる女性が大半を占め、俗語訳にはアノ人、カノ人、ソノ人、思フ人、ツレナイ人などと現れる。これはオレの場合も同様で、アノ人、思フ人などと出現する。対応する叙述表現は次のようにある。

- (1) ワシ：シリマセヌト云ハウ、頼ミニスル、恨ンデバツカリサカヘルワイ、ハナレハセヌ、云ハナイ、  
相手：知ウカイ、トガメテ下サルナヤ
- (2) オレ：思ウテヤレバヨカツタニ、思ハナンダデ、  
相手：思フテクレス

ワシは、第二段階の「シリマセヌ」が現れるが、大半は第三段階の「頼ミニスル、恨ンデバツカリサカヘルワイ」などである。ワシの相手に、第二段階の「トガメテ下サルナヤ」と第三段階の「知ウカイ、シラスデハナイゾ」などがある。一方オレは、第二段階に相当する例はなく、一人称・二人称とも第三段階の「思ハナンダデ、思フテクレス」である。

3 2 A 3 b 第三者

原歌4首のうち、俗語訳にはワシが2首3例、オレが2首3例ある。次に例を示す。

(1) ワシ

(1) 女共の見てわらひければよめる

けんげいほうし

8 7 5 かたちこそみやまがくれのくち木なれ心は花になさばなりなむ

(○女中タチメツタニワシヲ笑ハシヤルガ 此通り形コソ深山ノオクノ朽木ノヤウナレワシモ 花ニセウナラ心  
ハ花ニモナラウワサ

(2)

9 4 6 しりにけむき、てもいとへよの中は浪のさわぎに風ぞしくめる

(○コレ世間ノ衆 知テ居ラルルデモアラウカ モシ知ラシヤラズバ 今ワシガ云テキカスラ 聞テナリ氏 此  
世ヲバ 早ウステサツシヤレ テウド風ガ吹テ浪ノサワガシウシキリニウチヨセテクル荒イ海ベノヤウナ世ノ  
中デ アヽドウモ落付カヌアンドノナラヌヤウスチヤゾヤ

ふるのいまみち

(1) オレ

なりひらの朝臣

6 3 2 人しがぬわが、よぢの關守はよひ／＼ごとにつくもねな、む  
(○人ニシラサヌオレガ通ヒミチノ關所ノ番ハ ドウゾ毎夜ヨヒヨヒニ チヨツトナリトネムツテクレカシ ソ  
シタラソノ間ニハイラウニ

(2) 題しらず

よみ人しらず

9 0 4 ちはやぶる宇治のはし守なれをしそあはれとは思ふ年のへぬれば

(○「二」宇治ノ橋守ヨ ホカノ人ヨリハ 其方ヲサ オレハフビンニ思フ オレト同シヤウニ年ヘタ老人ヂヤ

ワシが呼びかける第三者は、女中タチ、世間ノ衆であり、オレの方は、関所の番、宇治の橋守である。対応する叙述表現は次のようになる。

- (1) ワシ：花ニモナラウワサ、云テキカスヲ、ドウモ落付カヌ、ヤウスヂヤゾヤ、  
女中タチ・世間の衆：笑ハシヤルガ、早ウステサツシャレ

- (2) オレ：ハイラウニ、フビンニ思フ、老人ヂヤト思ヘバサ、  
関所ノ番：ネムツテクレカシ

ワシが呼びかける相手「女中タチ、世間ノ衆」には、第二段階のシャルが登場するが、オレが呼びかける相手「關所ノ番」には敬意はなく、第三段階の「クレカシ」が使われている。

### 3-3 A 3c 故人

原歌3首のうち、俗語訳にはワシが1首1例、オレが2首2例ある。次に例を示す。

#### (1) ワシ

①ちゝが思ひにてよめる

841ふぢ衣はつる、糸はわび人のなみだの玉のをとぞなりける

たゞみね

- (2) オレ  
 ○ワシガ今服デ着テ居ルキモノ、ハツレテ來ル糸ハ 涙ノ玉ヲツナグ緒ニサナルワイ涙ノテウド玉ノヤウニ  
 コボレルノガ ハツレタ糸ヘカ、ルハ 玉ヲ緒ヘツナグヤウニ見エテサ

小野ノたかむらの朝臣

① いもうとの身まかりける時よみける

829なく涙雨とふらなむわたり河水まさりなばかりへりくるがに

○雨ガフツタナラ三途川ノ水ガマスデアラウ ソシタラ妹トガヨウ渡ラスニ又此世ヘモドツテクル「モアラウ  
ソノタメニ 此オレガ泣ク涙ガドウゾ 雨ノトホリニフレバヨイ

② 紀ノ友則が身まかりける時よめる

838あすしれぬ我身と思へどくれぬまのけふは人こそかなしかりけれ

○我身モ明日ハシレストハ思ヘドマダ暮テ明日ニナラヌ今日ノウチハ マアオレハカウシテ残ツテ居レバ 人  
ノ死ンダノガサ悲シイワイ

つらゆき

ワシが偲ぶ故人は父親、オレが偲ぶ故人は、妹、従兄弟（紀友則）である。対応する叙述表現は次のようである。

(2) (1)  
ワシ：着テ居ルキモノ  
オレ：泣ク涙、残ツテ居レバ、悲シイワイ

妹：モドツテクル「モアラウ、

ワシ・オレいずれも敬意はなく、第二段階の「悲シイワイ」「モドツテクル「モアラウ」などである

#### 四

#### 1 B1 直接的な心情表出

原歌16首のうち、俗語訳には、オレが16首21例出現するが、ワシは1例もない。

(1) 春のはじめのうた

1-1 春きぬと人はいへどもうぐひすのなかぬかぎりはあらじとぞ思ふ

○春ガキタト人ハ云ケレドモ マダ鶯ガナカヌ ナンデモ鶯ノナカヌウチハイツマデモオレハ春デハアルマイ  
トサ思ウ

(2) 桜の花のちり侍けるを見てよめる

そせいほうし

7-6 花ちらす風のやどりはたれかしる我にをしへよゆきてうらみむ

○サテモサテモアツタラ花ヲ 此ヤウニチラス風メガ逗留シテ居ル所ハ タレゾハ知テ居ル者ガアラウ 誰レ  
ガ知テ居ルゾ オレニ教ヘテクレイ ソコヘ行テゾンブンニ恨ミライハウ

(3)

凡河内ノみつね

7-5-0 わがごとく我を思はむ人もがなさてもやうきと世をこころみむ

○サテノ＼ウイ＼ヤ オレハコレホド人ヲ深ウ思フニ 人ハトカクソレホドニ思フテクレス オレガ思ウトホ  
リニオレヲ思フテクレル人ガアレカシ ソレデモヤツハリ此ヤウニウイモノカ タメシテ見ヤウニ

(4)

8-8-9 今こそあれ我もむかしはをとこ山さかゆく時も有こしものを

○今コソ此ヤウニ年モヨツテビンボフヲスレ オレモ昔ハイツカドノ男デ 繁昌ニクラシタ時節モアツテキタ  
モノヲ ア、クチヲシイ＼ヂヤ

(5) 屏風のゑによみ合せてかきける

坂上ノこれのり

9-3-2 かりてほす山田のいねのこきたれてなきこそ渡れ秋のうければ

○オレハ秋ガツライニヨツテ [一二] 此ヤウニヒタ／＼ト涙ヲ流シテ泣テサクラスワイ

みふのただみね

オレには全て敬意を示さない叙述表現を使つてゐる。特に文末部には多様な添意助詞「進ゼウカイ、出ヌコトゾイ、泣テサクラスワイ」の使用が注意される。

## 2 B2 自然物に仮託した心情表出

原歌33首のうち、俗語訳には、ワシが11首11例、オレが22首25例である。次に例を示す。

ワシ

1-1-

藤原ノ勝臣

472 白浪のあとなきかたにゆく船も風ぞたよりのしるべなりける

○浪ノ上ノ人ノトホツタ跡モナイ方ヘイク舟デモ 風ト云物ガサ手ヨリノ案内者ヂヤ ソレニワシガ戀ハソノナ風ノヤウナタヨリニセウ物サヘナイワイノ

つらゆき

597 我戀はしらぬ山路にあらなくにまどふ心ぞわびしかりける

○シラヌ山道コソマヨウモノナレ ワシガ戀ハシラヌ山道デモナイニ 此ヤウニマヨウ心ハサツライナンギナチヤワイ

きのつらゆき

804 初鴈のなきこそ渡れよの中の人のこゝろの秋しうければ

○人ノ心ノ秋ガウイユエニ ワシハ空ヲワタル初鳴ノヤウニ泣テサタテルワイ

オレ

(2)

うりんゐんにて桜の花をよめる

そらく法師

77 いざ、くらわれもちりなむ一さかりありなば人にうきめ見えなむ

○此ヤウニ桜ノ早ウ散テシマウノハ ア、ヨイ料簡ヂヤ ドレヤ桜ヨ オレモイツシヨニ散テドウナリトモナツテシマハウ 人ト云物モ 一サカリ盛リナ時ガアツテ ソレガ過キテオトロヘタナラバ 老ボレテラツシモナイヤウスヲ人ニ見ラルルデアラウホドニ

(2) はやく(マヘカタ)すみけるところにてほとゝぎすの鳴けるを聞てよめる

たゞみね

163むかしへや今も戀しき郭公ぶるさとしも鳴てきつらむ

(3)時鳥ヨ ソチモオレト同シヤウニ 昔ガ今デモ戀シイカ 所モ多イニ此本トノ在所ヘ鳴テ来タノハ昔ガ戀シイヤラ

(3) 僧正遍昭がもとにならへまかりける時に をとこ山にてをみなへしを見てよめる

227をみなへしと見つ、各行過るをとこ山にしたてりと思へば

(3)アノ女郎花ヲバア、イタヅラナ女ヂヤト思フテ オレハヨソニ見テサ通り過テイク コ、ハ男山ナレバ男ノ中ニマジツテ居ル女ヂヤト思フニヨツテサ

(4) みやづかへ久しうつかうまつらで山里にこもり侍りけるによめる

藤原ノ閑雄

282おく山のいはきもみぢりぬべして日光見る時なくて

(3)此ヤウニ高イ岩ノ築地ノヤウニ立ツテアル陰ニアル奥山ノ紅葉ハ日ノ光ヲ見ル時モナシニ散テシマウデアラウト思ハレルガ アアクチヲシイオレガ身ノウヘモテウド此紅葉ト同シ一チヤ

(5) きのとものり

753雲もなくなぎたるあさの我なれやいとはれてのみよをばへぬらむ

(3)雲モナウテ風モナイデアル朝ノ空ハヨウ晴テアルモノヂヤガ オレハソノヤウナモノヂヤヤラ 人ニイトイキラハレテバツカリ一生ヲタテル カウタトヘテイフワケハ 甚晴ト(イトハレ)被厭ト(イトハレ)詞ガ同

シ「ヂヤニヨツテサ 哥ト云物ハアヂナ」ヲヨムモノヂヤナイカイノ

(6) 891さ、の葉にふりつむ雪のうれをおもみ本くだちゆくわがさかりはも

○篠ノ葉へ雪ガツモツテ 末ガオモサニ本ノ方ガカタムイテユクヤウニ オレモ此ヤウニダンノ＼年ガヨツテ  
衰ヘテユクガ 昔男ザカリノ時節ハマアイツノ「デアツタゾイ ハア、

平ノ貞文

1033春の野のしげき草葉のつまごひにとびたつ雉のほろ、とぞなく

○〔一〕オレハ女ヲ思フ思ヒガシゲウテ 〔四〕ホロノトサ泣キマス

ワシもオレも第三段階の平常語の叙述表現との対応が大半を占めるが、ワシの中には「存ズル」「借リマス」など、第一、第二段階の叙述表現が散見するのに對し、オレにはそのような例は見ない。

## 五

叙述表現との対応関係に注目し、ワシ・オレの敬意の段階を検討してきた。前稿では読み手の存在の有無と「丁寧さ」との關係に注目し、ワシは読み手存在と関わりが深い点で、「丁寧さ」を表す代名詞、オレは読み手存在と関わりが希薄な点で「丁寧さ」が現れない代名詞と見なしたが、叙述表現との対応関係を見ると、その結果をよりはつきり確かめることができたかと思う。

検討してきたように、ワシは、一人称との關係で第一段階から第三段階までの叙述表現との対応関係が観察され、敬意ある段階から敬意を表さない段階まで使用範囲に広がりを持つていたが、オレの方は、基本的に第三段階が中心となつており、敬意ある叙述表現との対応関係は認められなかつた。中に一部、第二段階の「シャル」の使用例が確認されたが、しかし「イヤガラシャルナイ」と「ナイ」を付ける形を取つてゐる点から見て、第二

段階よりむしろ第四段階に通じると解せる。

ワシは、江戸時代に「わたくし」から「わたし」の形を生み出し、「わたし」がさらに「わたい」「わっち」「わし」を生じたという。近世前期上方語では「大名の姫・武家の女・遊里の女など、主として女の用いる語であるが、また男も用いることがある」とあり、山崎久之は「女性の盛んに用いる語で」あり、「女性語では「こな様」<sup>11</sup>「こなた」の両段階に、男性語では「こなた」段階に呼応するのが本体である」と述べている。「遠鏡」では、男女共に広く使っている人称代名詞であり、調査した結果は、女性は上位がワシ（39語）、次いでワタシ（12語）、ワシャ（6語）などと続くが、男性はワシ（71語）、オレ（54語）の順で、両者の合計が7割弱にも達している。このようにワシは、俗語訳ではすでに「女性の盛んに用いる語」という近世前期上方語の特徴を失い、俗語訳を代表する男女兼用の一人称代名詞となっている。しかも男性歌人の場合は、読み手存在の有無に関わらず出現する代名詞であり、敬意のレベルは第一段階から第三段階まで各段階に広がりを持ち、一般的で用途の広い男性の一人称代名詞として機能している。

それに対しオレの方は、近世前期の京阪語では「上は<sup>10</sup>大名から下郎まで、大名の後室・妻・姫から遊女・町娘まで、男女高下廣く用いられた」もので、山崎久之によると「おれ」は「男女共、<sup>11</sup>「こなた」「そなた」「そち」「おのれ」<sup>12</sup>の段階に用いられている」という。即ち「堅苦しい、最も敬意の高い鄭重の表現」を除く「普通敬語」から「ののしり表現」まで広く一般に用いられていたということになる。しかし見てきたように近世中期京阪語の「語資料である『遠鏡』では、専ら男性の一人称として機能するのみであり、しかも使用される場面は、読み手不在の、多くは人生の悲哀などを詠んだ内向的な和歌の俗語訳に限定されている。読み手不在であれば、オレに対応する叙述表現も、敬意を伴わない平常語が中心を占める結果となる。このオレは、近世後期江戸語では「江戸<sup>13</sup>では〈武士・船頭・日雇、雲助〉とすべてオレを用いている。さらに江戸の女（年寄り）は、オレである。」とあり、「共に男の用いるのが普通である」とあって、上は武士から下は雲助まで、専ら男性の一人称代名詞として広く一般に機能している。俗語訳に出現するオレも、この後期江戸語に通じる様相を示していると言えるか

資料は次のものを使用した。

『増補 本居宣長全集 第七』正三位本居豊穂校訂 再校訂者・本居清造

明治三十五年十一月発行 昭和二年一月増訂再版発行 吉川弘文館

本全集に関しては『本居全集首巻』（昭和三年三月発行 編纂者・本居清造 吉川弘文館）の「本居全集例言」に「内容に於て、明治三十六年刊行を了せし旧本居全集と異なることなし。」「宣長、春庭、太平の著書は、原本若しくは原本に近きものによりて、今次更に校訂せること勿論なり。…されば旧全集本は定本とも云ひつべきものなるを以て、原本との校合を避け、總べて旧全集本に由ること、せり。」とある。これを参考にすれば、この全集に収録されている『遠鏡』は原本、又は原本に近いものであり、定本ともいるべき性質の資料ということになる。この例言に依拠して資料の選択を行つた。

### 注

- (1) 「『古今集遠鏡』におけるワシ・オレ」「文藝言語研究 言語編」39
- (2) 筑波大学文芸・言語学系紀要 2001年3月
- (3) 小島俊夫『日本歴史研究』笠間書院 1998年 138頁
- (4) 山崎久之『国語待遇表現体系の研究 近世編』武藏野書院 1963年  
注(2) 155頁
- (5) 仁田義雄『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房 1991年 196頁
- (6) 原文には、「かたへに長く短くも、筋を引きたるは、歌にはなき詞なるを、そてていへる所のしるしなり」とあ

り、傍線部が随所に存在するが、考察の都合上、傍線部は全て省略した。

(7) 佐藤喜代治編「講座日本語の語彙 第11巻」明治書院 1983年 337頁

(8) 湯澤幸吉郎「徳川時代言語の研究」風間書房 1970年 38頁

(9) 注(3) 304頁

(10) 注(8) 37頁

(11) 注(3) 313頁

(12) 杉本つとむ「江戸東京語118話」早稲田大学出版部 1988年 91頁

(13) 湯澤幸吉郎「増訂江戸言葉の研究」明治書院 1981年増訂二版 87頁

#### 〔参考文献〕

- 1 井上豊「近世の作品と敬語」白石、真淵、宣長の敬語使用 —
- 2 「近世の敬語 敬語講座 (4)」明治書院 1973年
- 3 久曾神昇「古今和歌集(一)～(四)」講談社学術文庫
- 4 小島俊夫「日本敬語史研究」笠間書院 1998年
- 5 「国語語彙史の研究 十九」国語語彙史研究会編 和泉書院 2000年3月
- 6 塩澤和子「古今集遠鏡」における「人称代名詞」「文藝言語研究 言語篇」34
- 7 筑波大学文芸・言語学系紀要「言語篇」39
- 8 筑波大学文芸・言語学系紀要 2001年3月
- 9 竹岡正夫「古今和歌集全評釈上・下」右文書院 1976年
- 10 仁田義雄「日本語のモダリティと人称」ひつじ書房 1991年
- 11 山崎久之「国語待遇表現体系の研究 近世編」武藏野書院 1963年
- 12 湯澤幸吉郎「徳川時代言語の研究」風間書房 1970年
- 13 湯澤幸吉郎「増訂江戸言葉の研究」明治書院 1981年増訂二版